

# 関西における奄美郷友会の実態

—徳之島出身者の各集落郷友会に対する調査から—

田 島 康 弘

(1991年10月15日 受理)

The Actual Condition of Amami Immigrant's Association in the Kansai District

—on the Basis of the Investigation into Tokunoshima Immigrant's Associations—

Yasuhiro TAJIMA

## I. は じ め に

日本の近・現代史の中で、奄美出身者が本土の主として大都市部に移住を余儀無くされ、知友などの手掛りない異郷の地で生活を構築していくために、互いに励まし合い、寄り集って「郷友会」と呼ばれる集団を形成して活動してきたことは、良く知られた事実である。

これまで筆者は「社会地理学」の立場からこうした現象に興味を持ち、その実態や本質の解明を試みてきたが、今回この郷友会の実態をより具体的に把握するために、関西の徳之島出身者により形成されている各集落単位の郷友会のすべてを対象としてアンケート調査を実施したので、ここにその結果を整理し、まとめて報告しておきたい。

本来ならば、他の諸資料ともあわせて様々な興味深い問題についての考察を加えたいところであるが、これらの諸考察については別稿に譲ることとし、本稿ではとり急ぎ調査結果とこれにより判明する諸点のみを簡単に報告するに留めて、調査に協力して下さった多くの方々に対する責を果したいと考える。

## II. 調 査 の 概 要

郷友会の実態をより詳しく把握するため、筆者は、1988年の末から89年の春にかけて、関西の徳之島出身者により形成される各郷友会を対象を限定して、アンケート調査を実施した。調査対象を徳之島出身者に限定したのは、当時の関西奄美会の会長氏がたまたま徳之島出身者であり、この方に筆者が大変世話になったという人的なつながりがあったからという程度であって、特に深い理由はない。

集落レベルの徳之島出身者の会は、関西に合計38存在する。これら各郷友会の会長氏宛に、筆者は「郷友会に関するアンケートのお願い」<sup>2)</sup>を郵送し、回収するという方法をとった。この配布及び回収に当たっては、はじめ徳之島各郷友会の連合体としての「徳洲会」<sup>3)</sup>の会長氏およびその組織を通じ、会長氏の手紙なども添えて郵送し回収を持ったが、回収が思わしくなかったため、1989年の春に筆者出身が各集落郷友会の会長氏宅を訪問して回収に当たった。前述のように関西における徳之島出身者の各集落郷友会は38存在するが、最終的に回収し得たのは23であり、回収率は60.1%であった。

質問の内容は大項目で17、小項目で33の諸点に渡っていたが、これらを整理するに当り、次の8つの大項目にまとめて整理した。すなわち、1. 会の発足、2. 会の性格、3. 会の諸活動、4. 会員の状況、5. 郷里との関係、6. 選挙との関係及び文化活動、7. 会運営上の諸問題、8. 会の意義の8つである。以下、これらの項目毎に調査結果をみることにしたい。

### Ⅲ. 調 査 結 果

#### 1. 会の発足について

##### 1) 戦前の状況

まず、戦前の状況についてみると、第1表から、戦前既に現在の会の前身とも言うべき同集落出身者の集りが広く存在していたことがわかる。すなわち、1926～35年の間に9つの会が誕生し、このほか成立年次は不明であるが6つの会で何らかの集まりがあったとしており<sup>4)</sup>、残りも「なかった」というのではなく、「わからない」というものである。

これらの会の発足経過についてみると、大部分は彼らの居住する地域を母体にして発足しているが、中には同じ職場で働く同集落出身者を中心として発足したものもあった。前者の例が轟木、親与、喜念、崎原などの会の場合であって、アンケートの回答の中から発足経過の一部を引用しておきたい。

第1表 戦前における会発足状況

会発足年	T	A	I	計	
1926～30年に発足	2	0	1	3	}9
31～35年	2	2	2	6	
集りはあった	0	0	2	2	}6
集りがあったと聞く	1	2	1	4	
不明	1	4	3	8	
計	6	8	9	23	

注) Tは徳之島町、Aは天城町、Iは伊仙町の略であり、数字は、郷友会の数を示す。以下の各図表においてもとくに説明のある場合を除いては同様である。

親与会の場合は「大正末期より、例年春に同郷出身者の家族連れにより、武庫川河畔に於いて各自弁当持参で花見大会を行っていた」のであり、また、崎原会では「奄美（徳之島）からはるばる職を求めて大阪の地で都会の荒波にもまれ、生きてゆく中で、同郷の仲間達が淋しさをまぎらわす為に、お互いの肌を寄せ合い、励まし合い、故郷をしのび、心おきなく語りあえる会である様願い、昭和7年頃に『崎原同志会』として発足」させている。このほか轟木会では「昭和9年、神戸を中心に青年団として発足、同旗迄作成し…」とあり、また、喜念会でも「大正・昭和にかけて若者達が阪神方面に出稼ぎに来て、数名で母校や部落に何か役立つ物を送ろうと相談する集りもあった」と述べて、会の前身母体についてふれている。

後者の職場を中心に発足した会の例としては手々のケースがある。すなわち、「昭和の初期（元年～5年頃）、鹿児島県大島郡手々出身の子女が多数、大阪府泉北郡忠岡村所在の三羽鶴のタオル工場に働いていた頃に、同工場勤務の同志が相はからって親睦と相互扶助による経済基盤の確立を目指して同志会を結成したのが現在の手々郷友会の源流」であるとしている。このほか目手久の場合も後者の要素を含んでいたと言えよう。すなわち、「島の人が都会を目指したのは大正の初期と伝承され、当時は僅かな人数で、昭和に入って戦時産業の花やかな頃、神戸の川崎系、三菱系、神戸製鋼等で就労する人が多く、その地域で正式な会の名称なく、個々に目手久会として正月等に集まって楽しむ機会があったと聞く」としている。

以上の様に、現在の会の前身母体として、来阪者を囲んでの寄り合い程度のゆるいものから、花見等を行う親睦会、青年団活動を中心としたもの、故郷への送品のための寄り合い、工場内の同志会に至るまでの様々な出身者の集りが、戦前に存在していたことがわかるのである。

戦前に発足した会の会員数については5つの会しかわかっていないが、このうち4つの会では30～40世帯、残りの1つは10世帯と答えており、50世帯以下の小規模な集団であったことがうかがえる。

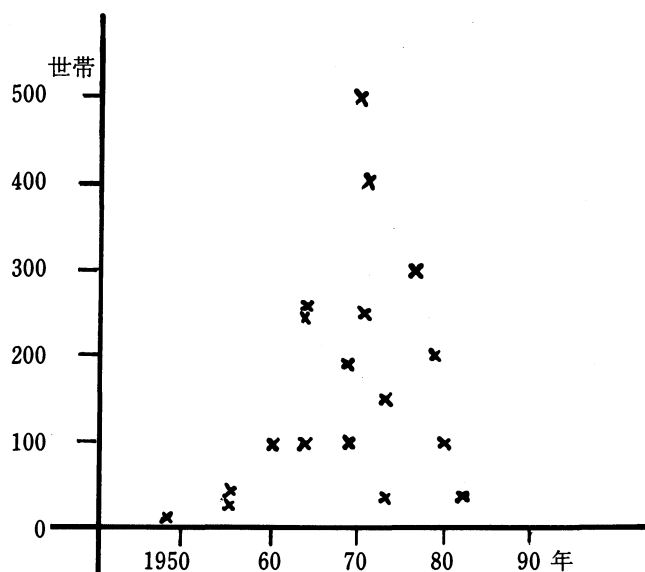
第2表 戦後における会の発足状況

発 足 年	T	A	I	計	
(戦前のみの記入	2	2		4)	
1945～50年			1	1	} 4(+3)
51～55	1	1		2	
56～60			1	1	
61～65	1	1	1	3	} 15(+1)
66～70	1		2	3	
71～75		1	4	5	
76～80		3		3	
81～85	1			1	
86～90					
計	6	7	9	23	

こうして戦前に発生した会も、戦争による会合や結社等の禁止により、戦時中に解散または事実上の活動停止状態を余儀なくされたのであった。

## 2) 戦後の状況

次に戦後における会の発足についてみよう。第2表から会の発足時期について2つのピークが存在するように思われる。その1つは戦後まもなくから高度成長期の以前の1960年頃までであり、もう1つは高度成長期およびそれ以降の時期である。戦前に発会した記録のある会であっても、戦後の再発足年がアンケートに記入されていた場合は、第2表では戦後の再発足年で整理した。また、戦前発足のみの記入の場合が4つあったが、この4つのうちの3つは「戦後まもなく」に、他の1つは「高度成長期」にそれぞれ再発足していることが、別の資料<sup>5)</sup>から判明するので、前者の時期の発会数を4+3で7、後者の時期のそれを15+1で16と考えても差支えないであろう。以上のように整理し、全体的にみると、多くの会が高度成長期およびそれ以降の時期に成立していることがわかるのである。なぜ、多くの会がこの時期に成立したかの理由については、次の「会発足の動機」以下の部分で考察しよう。



第1図 会発足時の会員規模

注) 18の会のみで5つの会は不明

その前に、ここで会発足時における会員世帯数を発会年との関係でみると、第1図のようになりこの図から以下のことが言えよう。

- ① 終戦直後に発会した会は小規模であったが、高度成長期に入ると発会時の規模が次第に大きくなってきたこと。
- ② しかし、高度成長期以降に発会した会の中には小規模の会もあり、多様であること。

③ このことは、出身集落そのものの規模、上阪者の多少の他に会の結集力も関係していると思われること。

などである。

第3表 発会の動機

動 機	T	A	I	計
親睦や故郷との連絡	3	4	6	13
他の地区がしていたので	1	2	1	4
不明および無記入	2	2	2	6
計	6	8	9	23

### 3) 会発足の動機

次に会発足の動機についてみよう。発会の動機について尋ねた結果を筆者は第3表のように整理した。すなわち、大部分が「親睦や故郷との連絡」を動機としており、一部に「他の地区がしていたので」というやや消極的なものもみられたので、これを別にして整理した。ただし、後者の中でも2つの会は前者の内容にもふれており、他地区でも行っていた事を主とした答は2つの会だけであった。これらの会の発会年は、当然ながら他よりも遅い時期（'73年、'79年、'80年、'82年）となっている。

ここで、前者についてより具体的にみるために2～3の例をあげよう。

「遠くの地にある郷里をしのび、苦楽を共に語り合えたらなあ」ということで。

「終戦後、奄美大島が米国信託統治下にあった為、郷里に帰らず職を続けている方達が、せめて年に1回は集って郷土の話をしながらお互いに励まし合おうと家族が集ったのが動機」である。

「戦後の混乱期に、郷土で幾多の辛酸を経験した郷友が、本土復帰後続々都会を目指し、特に関西地区で生計する人が多くなった。やっと落着いて故郷を忘れられない。この時期に一堂に会し、お互いが話し合い明日へのはげみにしたいということ、或は子弟の指導・育成という見地から、特にコミュニケーションを作りたい目的」ではじめた。

以上みたように、異郷の地での生活という状況の中で、故郷をしのび、互いに励まし合い、心の寄り処となるものとして会を発足させたと言うことができよう。

### 4) 発足に関する整理

以上、会の発足年や発会の動機についてみてきたが、以上のことから下記のような整理をすることができよう。

① 多くの会は戦前にそのルーツを持っており、戦時中に解散または事実上の停止状態になったこと。

② 戦後の（再）発足は高度成長期以前と以後との2つに大きく分けることができ、前者は戦後

の奄美の占領下における戦前の活動の復活として、および本土復帰後の同郷者の急激な増加という状況の中での結成とみることができること。

- ③ 後者の高度成長期以降の結成は、「やっと落ち着いて」とあるように、移住後一定の時期を経て、生活が安定し、多少の余裕が生まれきたことがその背景にあるものと考えられる。また、この時期に発足した会は、比較的前期の「主体的」なものと、後期の一部にみられる「他地区がしていたので」というやや消極的なタイプのものの2種類に分けることができよう。
- ④ 発会の動機の中には「経済基盤の構築と拡大に相協力し合う」という実際生活上の役割をも担った強力な会も存在したことが注目される。

## 2. 会の性格

次に会の基本的な性格にかかわる2～3の事柄を整理しよう。

### 1) 会則の有無

23の会のうち、会則を持たない会が1つだけ存在するが、他はすべて会則を持っており、親睦などを主な目的とする会にしては、その整備がかなり進んでいると見ることができよう。

### 2) 会の目的

次に会の目的を整理すると第4表のようになる。この表から以下のことが指摘できよう。

- ① 「親睦」がほとんどの会に共通していること。
- ② 実際生活上の協力（b～d）を掲げている会が約半数程度存在すること。
- ③ 郷里に関する内容（e～g）を掲げている会が過半数であり、これが重視されていることなどである。

第4表 会の目的

	T	A	I	計	総数に対する割合
会 総 数	6	8	8	22	100%
a 親 睦	6	7	8	21	95
b 相互扶助	4	3	4	11	50
c 生活の向上	4	2	1	7	32
d 青少年の指導	3	3	3	9	41
e 伝統文化の保存	4	3	2	9	41
f 郷土愛の高揚	4	7	4	15	68
g 郷里の発展への寄与	5	5	3	13	59
h その他	2			2	

注1) アンケートでは、これらの目的を示し、その会が掲げている目的のすべてを選択してもらった。

2) Iの1つは会則がない。

3) その他の2は「献血」および「融和」である。

### 3) 会員規模と組織率

次に、現在の会員世帯数とその組織率についてみた。第5表から、会の世帯規模は100世帯台が最も多く、200世帯台がこれに続き、300および400世帯台も少なくないことがわかる。

また、会員の組織率は70%より高い組織率をもつ会で全体の3分の2を占めており、全体としてかなり高いとみることができよう（第6表）。しかし、中には40%台と過半数に達しない会も多少あることがわかる。会の基本的性格をみる場合、この点は会費の納入率（後出）とあわせてみると、その性格がよりはっきりするように思われる。

第5表 会の会員規模

世 帯 数	T	A	I	計	割合
0～ 99	1		1	2	8.7%
100～199	2	3	3	8	34.8
200～299		2	3	5	21.7
300～399	1	1	1	3	13.0
400～499	1	2		3	13.0
500～599	1			1	4.3
600～			1	1	4.3
計	6	8	9	23	100.0

第6表 会の組織率

	T	A	I	計	割合
90%以上	2	2		4	22.2%
80	1	1	2	4	22.2
70		2	2	4	22.2
60	2		1	3	16.7
50			1	1	5.6
40		1	1	2	11.1
小計	5	6	7	18	100.0
不明	1	2	2	5	
総計	6	8	9	23	

## 3. 会の諸活動

### 1) 会の具体的活動

次に、各会が行なっている具体的な活動を第7表に示した。まず、総会をほとんどの会が行っている。総会を行なう時期は会によりまちまちであるが、9月が最も多く、4月がこれに続き、1月も少なくない。

次に多い活動は敬老会、忘年会、慶弔の見舞などである。とくに敬老会や慶弔の見舞は、高令者

第7表 会の具体的活動

	T	A	I	計	実施率 <sup>1)</sup>
総 会	6	8	8	22	95.7%
敬老会	5	5	3	13	56.5
忘年会	3	5	5	13	56.5
慶弔見舞	5	5	3	13	56.5
新年会	3	4	4	11	47.8
運動会	4	2	4	10	43.5
旅行レクリエーション	4	2	3	9	39.1
年の祝	2	3	2	7	30.4
郷里との情報交換	2	3	2	7	30.4
郷里との人の交流	3	2	2	7	30.4
芸能会	2	2	1	5	21.7

注1) 実施率の総数(分母)は23である。

2) このほかの活動として献血をあげた会もあった。

や祖先を大切にする奄美の伝統を反映して、重視されているように思われる。また、敬老会は総会の際にあわせて行なう会が多い。忘年会と新年会では忘年会を行なう会の方が多いが、両方とも行なう会も7つあり、このうち2つは新年会を2月に行なっている。

以上の室内で行なう行事とやや質を異にするものが運動会で、これは家族参加という形にもなるため最も力を集中する行事である。半数近くの会がこれを行なっている。時期は9～11月の秋が多いが、春の5月に行なう会もある。旅行や花見会、月見会などのレクリエーションを行なう会も4割ほどあり、これらは4～6月の春から初夏にかけての時期に行なわれることが多い。また、こうした活動は会の婦人部など会の下部集団単位で行なわれることもある。

年の祝も敬老精神のあらわれと言えようが、3割ほどの会で行なっている。また、郷里との情報交換や人の交流も3割ほどの会が行なっており、総会等の際に町長や集落の代表などと呼んで郷里の話聞くことなどが行なわれている。芸能会は、芸能部や婦人部など会の一部で行なうか上部団体への参加時に行なう<sup>2)</sup>という形が多いようだ。

以上の諸活動をまとめると、①総会、忘年会、新年会等の親睦を主としたもの、②敬老会、年の祝、慶弔見舞等の高令者や祖先を敬う精神を内容とするもの、③運動会、旅行・レクリエーション、芸能会など娯楽や健康維持を主としたもの、④郷里との交流を主としたもの、の4つぐらいに整理することができるであろう。

## 2) 活動資金

次に会の財政面についてみよう。会費を徴収している会が11、徴収していない会が12であり、約半分の会は会費を徴収していない。しかし、このうちの1つは総会開催時に参加者から徴収しており、また、以前は会費を徴収していたと答えた会が2つあって、会費制の変化がうかがえる。とこ



第8表 会費の徴収額

年間徴収額	T	A	I	計
2000円	2		2	4
2500	1	1		2
3000		1		1
3600	2			2
6000			1	1
不明		1		1
計	5	3	3	11

第9表 会費の徴収率

	T	A	I	計
100%	3			3
90				
80			1	1
70				
60	1	1		2
50				
40	1	1		2
30			1	1
不明		1	1	2
計	5	3	3	11

第10表 会費と寄付金との比率

	会費と寄付金の比率	郷友会数	計
会費の方が多い会	3:1	1	2
	2:1	1	
ほぼ同じの会	1:1	3	3
寄付金の方が多い会	1:2	1	7
	1:3	3	
	1:4	2	
	1:5	1	
計			12

注) 総会で出席者から徴収する会の1つを含む。

ろで会費を徴収している会の徴収額についてみると、年間、一世帯当りで2000円～3600円くらいの会が大部分であり、とくに、2000円～2500円程度が多くなっている（第8表）。

次に、会員の間での会費の徴収率をみると100%完全徴収している会は3分の1程度であり、この他は80%～30%まで様々であった（第9表）。

会費を徴収していない会の運営は専ら寄付金に依存しており、会費を徴収している会の場合もかなりの寄付がある。そこで、会費と寄付金との比率をみると、「会費の方が多い」会もあるが、逆に「寄付金の方が多い」会の方がずっと多く、その比率も会費の3～4倍が多数を占めていて、むしろ寄付金の方が主である会が主流であることがわかる（第10表）。

第11表 会の財政規模

	T	A	I	計	割合
50万円未満		1	2	3	13.6%
50～100万	1	4	3	8	36.4
100～150万	2	2	4	8	36.4
150～200万					
200万円以上	3			3	13.6
計	6	7	9	22	100.0

注) 不明が1あり。

第12表 会員名簿の発行回数

発行回数	T	A	I	計	割合
1回		3	1	4	18.2%
2		1	3	4	18.2
3	1	4	2	7	31.8
4	1		2	3	13.6
5	2			2	9.1
6～10	1			1	4.5
11回以上	1			1	4.5
計	6	8	8	22	100.0

注) 発行したことのない会が1つある。

第13表 会員名簿の発行年次

発行年	T	A	I	計	割合
戦前		1		1	2.1%
1945～1955年(S.20～30)	1			1	2.1
56～60(31～35)	1			1	2.1
61～65(36～40)	2	1	1	4	8.5
66～70(41～45)	2		1	3	6.4
71～75(46～50)	3	1	4	8	17.0
76～80(51～55)	4	2	3	9	19.1
81～85(56～60)	4	4	6	14	29.8
86～88(61～63)		2	4	6	12.8
計	17	11	19	47	100.0

また、会の財政規模についてみると、大部分の会は50万円～150万円程度であるが、中には200万円を越える規模の会もあり、こうした財政規模の大きな会はいずれも寄付金が会費の3～5倍と大きく上回っている会である<sup>7)</sup> (第11表)。

### 3) 会誌の発行

ほとんどすべての会で、会員名簿を発行しており、中には会誌を発行している会もある。こうした会の広報・出版活動についてみよう。

まず、会発足以後の名簿の発行回数をみると、3回発行している会が全体の3分の1程度を占めて最も多い (第12表)。また、ほぼ「2年に1回」会員名簿を作成・発行する会もあって、こうした会は発行回数が最も多くなる。

次に、発行年が判明したすべての名簿について、その発行年を整理した (第13表)。これによると、1970年以降の発行が全体の80%近くを占めており、とくに80年代前半に最も多く発行されていて、最近に多いことがわかる。これは、古い名簿ほどその存在を知りにくいということの他、会の成立自体が比較的近年に多いということの反映でもあろう。

次に、会報 (会誌) はほとんど発行されていないが、かつて発行していた会は6つあり、現在も年1回定期的に発行している会が1つ存在する。このほか「文集」(1973年、目手久会)や「歌集」(1981年、手々会)を発行した会があり、また、上述の名簿に様々な記事を載せて記念誌的なものとして発行するケースもしばしばみられる。

## 4. 会員の状況

### 1) 居住状況

会員の居住状況を全体的にみると、会毎に特定の (いくつかの) 地域に集住する傾向がみられる。アンケートの結果に主に依拠して、その大まかな傾向をみると、第14表のように集住の地域を5つのタイプに分けることができ、3分の2近くの会に集住の傾向がみられることが明らかである。このほか、この表から、①徳之島町の会にこうした集住の傾向が強いこと、②天城町の会は尼崎周辺

第14表 各会会員の居住傾向

	T	A	I	計
1) 泉南方向	T <sub>1</sub> T <sub>4</sub>	A <sub>3</sub>		3
2) 大阪東部・東北部方向	T <sub>2</sub>		I <sub>6</sub> I <sub>7</sub>	3
3) 大阪北部方向			I <sub>8</sub>	1
4) 尼崎周辺地区	T <sub>6</sub>	A <sub>1</sub> A <sub>2</sub> A <sub>4</sub> A <sub>8</sub>		5
5) 神戸市西部方向	T <sub>5</sub>		I <sub>1</sub> I <sub>9</sub>	3
6) その他(多極又は分散)	T <sub>3</sub>	A <sub>5</sub> A <sub>6</sub> A <sub>7</sub>	I <sub>2</sub> I <sub>3</sub> I <sub>4</sub> I <sub>5</sub>	8
計	6	8	9	23

第15表 総会員数に占める移動者の割合

	T	A	I	計
0～5%	3	5	4	12
6～10	2	1	2	5
11～			1	1
不明	1	2	2	5
計	6	8	9	23

第16表 住居移動者の移動方向

	T	A	I	計	割合
市街地内部	1	3	1	5	20.8%
現在の居住地周辺の郊外	4	5	4	13	54.2
郊外住宅地	1	1	3	5	20.8
他県などの遠隔地			1	1	4.2
小計	6	9	9	24	100.0
不明	2	2	2	6	
総計	8	11	11	30	

注) 複数回答を含む。

地区への集住の傾向が強いこと、などの傾向がわかるが、より基本的には会単位で独自性を持つと言えそうである<sup>8)</sup>。

居住状況に関連して、近年の会員の住居移動の状況についても、①移動者の数や割合、②移動方向についてたずねた。その結果、移動者数については、①60年代の後半から70年代前半の頃は移動者も多かったが、その後は移動者の数が減っていること、②近年の移動者の割合は、ほとんど0～10%の間であり、中でも5%以下が多いこと(第15表)がわかった。

また、主な移動の方向では、「今の居住地周辺の郊外」が過半数で最も多く、「郊外住宅地」も多いが、「市街地内部」への移動も5分の1程みられることがむしろ特異であろう(第16表)。これは自営業者層に多いようで、職業との関連があるように思われる。

## 2) 会員の職業

次に職業上の特色をみよう。一つの大きな特色は会単位で特定の職業に卓越している傾向が強いことであり、また、自営業的職業が比較的多いことであろう。この傾向は徳之島町の会にとりわけ顕著であり、天城町の会の場合は逆に少ない(第17表)。これら自営業の中身については様々であって、徳之島町の5つは「プラスチック形成加工」、「建設業」、「鉄鋼業」、「自動車修理」、「ケミカルシューズ」、天城町の1つは「建設業」、伊仙町の3つは「飲食業」、「建設業」、「縫製業」であって、建設業が重なっているだけである<sup>9)</sup>。

第17表 会員の職業上の特色

	T	A	I	計
自営業が卓越	5	1	3	9
サラリーマンが卓越		6	5	11
不明	1	1	1	3
計	6	8	9	23

第18表 頼母子講の実施状況

	T	A	I	計
現在行なっている	1	2	2	5
過去に行なったことがある	2	1	2	5
行なったことがない	3	4	4	11
不明		1	1	2
計	6	8	9	23

### 3) 頼母子講について

次に頼母子講の開催状況についてみると、約半数の会で現在行なっているか、またはかつて行なった経験を持っていた（第18表）。現在行なっているものの中には100人規模という大きなものもあったが、これを除くと30人程度あるいはそれ以下であり、一桁台のものも含まれている。また、かつて行なっていた時期は、1965年から80年頃までが多いようで、その規模は20～30人程度であった。

## 5. 郷里との関係

ここでは郷里との関係を1) 郷里で行なう諸活動に対する援助、2) 帰村状況、の2つの側面についてみよう。

### 1) 郷里の諸活動に対する援助について

#### ① 援助の対象・内容

まず、どのような事柄にたいして援助がなされているかをアンケートから整理してみよう（第19表）。援助の対象として多いのは、(1)小中学校とくに小学校の（何十周年）記念行事に対する寄付（具体的には図書館、体育館、放送室等の建設・設置、ピアノ、視聴覚備品、舞台幕など様々である）。(2)氏神をまつる神社の改築・修繕（鳥居、祭壇など）。(3)公民館・集会所の建設、修繕、(4)老人クラブに対する寄付（いこいの家の建設、敬老の日の記念品など）。(5)生活会館、福社会館等の建設に関する寄付、などである。このほか戦ぼつ者の慰霊碑建設、泉重千代氏胸像建立、災害見舞などに対して寄付が送られている。

第19表 郷里に対する援助の内容

援助の対象・内容	件数	備 考
小(中)学校	7	図書館, 体育館, 放送室, ピアノなど
氏神・神社	7	鳥居, 神社の修繕など
公民館・集会所	6	テント, 幕, カーテンなど
老人いこいの家・老人クラブ	5	
福祉会館・生活会館	4	
災害時の援助	2	豪雨見舞, 海難事故
慰霊碑	2	
泉氏胸像建立	2	
その他	4	情報誌, 郵便局, 叙勲, バレー優勝
計	39	

## ② 援助の量 (金額) について

これまで行なってきた援助のおよその程度を知るために, 援助総額について尋ねた。記録もなく不明との答えもあり, また, 会としてではなく個人として行なっているものも少なくなく, 厳密な把握は困難であったが, およそ第20表のような結果を得た。すなわち, 多くの会で100~300万円ぐらいの援助を行なっており, 中には1000万円をこえるものもあった。ただ, こうした援助は金額で示すことができるようなものではないかも知れず, そうした意味では, この表はあくまで一つの目安にすぎない。

なお, 郷里に対する協力の一形態として, 過疎化の中で廃止の危機に追い込まれている郷里の郵便局存続のため, 郷里の郵便局で預金をしたり, 年賀状を購入したりする運動を行なっているかどうかを尋ねたところ, 会としてこのような運動をすすめているところが3つあり, その他個人で行なっているところもあることがわかった。

第20表 援 助 の 総 額

総額	T	A	I	計
1000万円以上	2		1	3
300	1			1
200	1	2	1	4
100		2	1	3
50			1	1
50万円以下			1	1
不明		1	1	2
金額が無回答	2	3	3	8
計	6	8	9	23

## 2) 帰村状況について

帰村者<sup>10)</sup>は全体としてきわめて少ないことが実態のようである。過去の帰村状況についてまとめた第21表から、「1%以下である」と「いない」とをあわせると約半数になり、「1～5%未満」を加えると4分の3を占める。また、5%以上の各答も推測の場合や「はっきりしないが」とことわっている場合もあり、必ずしも事実に基づいた数字とは言えないようである。

将来の帰村者の予測をみると、今までよりも増えるのではないかという予測が感じられはするものの、不明が多くなったほかは過去の傾向と大差はないと言えよう（第22表）。

帰村が少ない理由については「人情豊かな当時を想像して話題になる」（検福）が「子供達の将来を考えて本土に永住する意向」（親与）が強いようである。

第21表 これまでの帰村者

	T	A	I	計
20%以上			1	1
10～20%		1		
5～10%		1	2	3
1～5%	1	2	2	5
1%以下	2	1	2	5
いない	2	3		5
不明	1		2	3
計	6	8	9	23

第22表 将来の帰村者の予測

	T	A	I	計
20%以上			2	2
10～20%		1	1	2
5～10		1		1
1～5		2	1	3
1%以下	1	1	1	3
いない	1			1
不明	4	3	4	11
計	6	8	9	23

## 6. 選挙との関係および文化活動

ここでは、1) 会と選挙運動との関係 2) 会による奄美の伝統文化の保存運動、についてみた。

## 1) 会と選挙との関係

これについては、②の「選挙にかかわらないことを了解事項にしている」が最も多く、「規約で

第23表 会と選挙との関係

	T	A	I	計	割合
1) 選挙にかかわらないことを規約で決めている	2	1	1	4	14.3%
2) 選挙にかかわらないことを了解事項としている	3	7	4	14	50.0
3) 会員の立候補者は応援することがある	3	2	1	6	21.4
4) その他	1		3	4	14.3
計	9	10	9	28	100.0

注) 複数回答を含む。

第24表 伝統文化保存の活動

	T	A	I	計	割合
総会・親睦会等で行なっている	1	4	1	6	22.2%
奄美芸能大会へ出演し、練習している	1	2		3	11.1
日頃踊りを楽しみながら努力している	1		1	2	7.4
婦人部中心に努力している	1	1		2	7.4
民芸保存部を特設している	1			1	3.7
一部の人が民謡教室を開いている	1			1	3.7
かつては若者に踊りを教えていた			1	1	3.7
方言のまま(民謡を)練習している			1	1	3.7
出身者同士では方言を話すようにしている			1	1	3.7
ない			2	2	7.4
不明	1	3	3	7	25.9
計	7	10	10	27	100.0

注) 複数回答を含む。

決めている」をあわせると3分の2近くに達し、会としては選挙とは無関係とする会が多いことがまず確認される(第23表)。しかし、他方では、③「会員の中からの立候補者の場合は応援することがある」とするものも必ずしも少ないとは言えず、また、④の「その他」の中味は、「有力者とその同調者がいる」、「かかわりがあると思う」など選挙との関係があることを認める傾向もあり、「この間に対する応答に実情からみて苦慮する」などの答えともあわせると、一部に於いてかも知れないが、会と選挙との関係が完全にすっきりしているとは言えない面もあると言えよう。

## 2) 伝統文化保存の活動

次に、奄美の伝統文化の保存に対する努力についてみると、「ない」との答は2つだけで「不明」をあわせても9と全体の3分の1にすぎず、残りの3分の2が様々な形で伝統文化の保存に努めていることがわかる(第24表)。とくに、総会、親睦会、祝いの会などの様々な集りの際に民謡や踊りを行なって皆でおぼえるように努めることが広く行われており、年1回の奄美大会の際に行なわれる芸能大会が、この集約点となっている。中には、民芸部を特設し「歌謡集」を出版している会さえある。また、方言保存の努力がなされている会があることも注目に値しよう。



## 7. 会運営上の諸問題

次に、会の運営上の当面する問題やその対策・工夫等について尋ねた。

### 1) 若い世代に対する対策

最も大きく指摘されている問題は、若い人とくに関西で生れた2世・3世の結集が弱いという点である。そこで、会の指導部が若い世代に対して会の継続のためにどのような工夫をしているかについて聞いた。

第25表から、8割近くの会でこの問題に対するとりくみがなされていることが確認される。その内容をみると、まず、郷里出身者に対する情報収集活動が重視され広く行なわれていることがわかる。また、野球等の球技大会の開催など青年部活動の重視や、青年を率先して役員に抜擢し、会の運営に参加させる等の努力がなされている<sup>11)</sup>。さらに、夏季や年末には帰省するものも多いので、その際の親に対する「奉公」を呼びかけたり、新婚旅行には郷里へ行かせるなどの各種の「郷里旅行」が工夫されている。2世会を結成している会はなかったが「したいと思う」という回答はあった。「その他」では、「同級生の集いを開いている」、「会合の都度説得や指導をしている」、など様々な苦心がうかがえた。

### 2) 運営全般に対する工夫

この他の会の運営全般に対する工夫については、次のような努力・工夫がなされていることがわかった。

- ① 運動会、総会、花見会等のレクリエーションなどの1つ1つに対し工夫や配慮をすること（郷里の行事・舞踊を現代風にアレンジする、カラオケ大会、宝くじの取入れなど）。
- ② 青年部、婦人部、老人会などを会の内部に組織し、それぞれの層にあった活動をする。とくに青年を役職につけること。

第25表 若い世代に対する対策や工夫

	T	A	I	計	割合
郷里出身者の情報収集、勧誘	3	3	4	10	29.4%
青年部球技大会	4		3	7	20.6
その他の青年(部)の活動の重視	3	2	2	7	20.6
郷里旅行	3			3	8.8
伝統芸能の保存・伝承	2		1	3	8.8
2世会の結成				0	
その他	1	2	1	4	11.8
小計	16	7	11	34	100.0
特にしていない	1	3	1	5	
総計	17	10	12	39	

- ③ 出身者全員の調査・把握、郷里の生活様式、出来事や変化の記録など郷里に関する情報・文化活動。

また、会の開催の仕方についても、経済上の理由から各単位郷友会と校区郷友会とを1年おきに開催しているなどの答もあった。

## 8. 会の今日的意義

最後に、郷友会の存在の今日的意義について自由に述べてもらった。23人中16人の方々が多少少なかれこの間に答えて下さったが、これらを整理すると以下ようになる。

1) 「先輩、後輩、幼な友達などの同窓者など世代をこえた同郷者の親睦・交流」ができ、貧しく苦しい時をふり返るなどして生活の力にしうる。また、若い上阪青年の育成・指導の場ともなり、彼らにとっても励みになること。

2) なかでも親戚や近親者の交流の場ともなり、上阪の若者にはとくに有意義で、先祖を思い、親や先輩への感謝の気持を育てること。

3) 故郷との交流(知名人を呼び交流するなど)を通じて、自分の生まれた故郷を愛し、故郷の方々の幸福や発展を願い、実践するなど故郷とのつながりの場であること。また、自分達のルーツの研究も行いうること。

この存在意義のやや歴史的な考察をするならば、「今までは地縁・血縁を唯一の頼みとして生活基盤を構築してきた。しかし、これからはせまい殻にとじこもらず、地域社会に充分なじんだ活動を志向していきたい」という方向性が、郷友会のこれまでの存在意義と今後のあり方を示唆しているように思われる。

同時に、この質問に対する回答で、当面する諸問題にふれたものもあった。そのひとつが前述の若い者への会の継承の問題である。

- ・故郷を知らない2・3世の関心がうすい。
  - ・上阪の1世でも、最近の若い者は生活も豊かで、交通の発達から郷里へも容易に帰れることなどから、参加がわずらわしいようだ。
  - ・昭和30年代以降生まれの若い者に会が継承されるか不安である。
- などの声がきかれた。このほか、
- ・会員もそれぞれ独自の生活基盤を持つようになり、集まるのも困難になってきている。
  - ・飲み会からの脱皮をはからねば…
  - ・集落の会から様々なレベルの上部の会<sup>12)</sup>までたくさんあって、会が多すぎる。
  - ・財政的に豊かな会とそうでない会とがあり、そうでないところは役員の協力で何とか成り立っているのが現状だ。

などの問題点も指摘されていた。

以上の様なさまざまな問題をかかえてはいるものの、他方でこれらの会が現実、そして着実に

行なわれてきたし、また行なわれていることも事実であり、この事実としての重みを充分ふまえる必要があるだろう。

#### Ⅳ. お わ り に

今回実施した調査により、調査結果の部分で述べたような様々なことがらが明らかとなった。最後に、今後の課題について、いくつかの点にふれておきたい。

- 1) 先ず、前記文章中で指摘した、「寄付金」および「居住地」や「職業」をめぐる諸問題の解明がある。
  - 2) また、戦後の会の動向の分析も不十分である。とくに、高度成長期における先住者の経済的基盤の形成と若い出身者の上阪の増大をめぐって。
  - 3) 郷友会の現代的意義と将来の問題、とくに若い人達のあり方の分析。これは各郷友会が当面している最大の問題である。
  - 4) 個人レベルでの実態の解明。
- など。

今後引き続き、これらの課題について追究していきたい。

#### 謝 辞

本研究をすすめるにあたり、当時の関西奄美会会長の郷野健一郎氏、関西徳洲会会長泰山啓次郎氏、徳之島新聞社の村田助吉氏、手々郷友会会長の藤井光良氏をはじめとした徳之島出身の郷友会役員の方々には大変お世話になった。また、徳之島各郷友会の会長諸氏には、筆者のアンケートに対し心良く回答を寄せていただいた。とくに、郷野氏、村田氏には郷友会全般に渡る情報や諸資料の便宜を、また、藤井氏には研究をすすめる上での理論上の御指導、御協力をいただいた。以上の方々に対し、心から厚く御礼申し上げます。

#### 注

- 1) 関西奄美会の会長は各島を主な単位とした臨番制である。
- 2) A4版で、全体で7頁に渡る。
- 3) 医療法人の「徳洲会」のことではない。
- 4) 以上で23のうちの15となり、65.2%、約3分の2であって、少なくともこれだけの会では何等かの集りがあった。
- 5) 各会の名簿等の資料である。
- 6) 例えば、年1回の奄美会の大会の際に行なわれる芸能大会への参加などである。
- 7) この寄付金の性格や特徴については、より詳細な分析が必要であろう。
- 8) この集住傾向の分析については、他の資料もつけ加えて別の機会に詳述するつもりである。
- 9) これについても、居住地と同様に別の機会に詳しくみるつもりである。
- 10) 一時的な帰省ではなく、永住的な帰村のことである。
- 11) アンケートをお願いした会長氏の中にも、「生まれも育ちも西宮」という2世の方もおられた。
- 12) 集落会、校区会、校区連合、町レベルの会（町連合）、島レベルの会（島連合）、奄美会など。さらに、県人会、九州人会もある。